
幻影 - Black Star

翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻影 - Black Star

【Nコード】

N7888D

【作者名】

翠

【あらすじ】

漆黒の星 ブラック・スター を手に入れるために調査をしていた快斗。その関係者に「時計台事件」で怪盗キッドを追いつめた工藤新一がいることを知り、調査のため帝丹高校に潜入することに…。

chapter 0 愚者（前書き）

「漆黒の星 ブラック・スター」のお話です。主にキッド視点で書いていきます。

新一×蘭×快斗 もしくは 快斗×蘭×新一のようになりますので、
新一×蘭や快斗×青子しか受け付けないという方はご注意ください。

chapter 0 愚者

工藤新一に関する調書

工藤新一。

帝丹高校2年B組。

身長174cm、体重58kg。

父親は世界的に有名な推理小説家、工藤優作。

母親は元女優、藤峰有希子。

現在は米花市米花町の豪邸で一人暮らし。

幼なじみで恋人と噂される、毛利蘭が家事の面倒をみている模様。推理オタクであり、中でもシャーロック・ホームズの大ファン。通称、「東の名探偵」「平成のシャーロックホームズ」

白馬とは違うタイプの探偵……そして、初めて怪盗キッドを追い詰めた男。

「げつ。すっげーおぼっちゃんじゃねーか。白馬といい、工藤といい、探偵は金持ってるねーと出来ねえのか？」

黒羽快斗はひとりぐちると、受け取った資料に目を通しながら、ロッキングチェアから両脚を放り出した。

亡き父の付き人であり、怪盗キッドの良き協力者である寺井黄之助から、工藤新一に関する調書が揃ったと連絡を受けたのが今朝のこと。快斗は授業が終わると早々に寺井の家に足を運んでいた。

それにしても。と、寺井はすっかり寂しくなった頭をかいてつぶやいた。

「快斗ぼっちゃまにそっくりですな。顔かたちだけでなく、背格好や声まで」

メガネの奥の、目尻にシワを刻んだ優しい瞳は、ディスプレイに映し出された高校生探偵のインタビュー動画を追っている。

「いやあ、ラッキーだったぜ」

快斗はイタズラを思いついた子供のようにニヤリと笑った。

「鈴木財閥関係者を洗っていたら、工藤新一が出てきたんだからな」

快斗がパチンと指を鳴らすと、三枚の写真が指の間から現れた。

「ブラック・スターに近づくには……三女の鈴木園子が、彼女の親友でもある毛利蘭が、工藤新一か……だな」

寺井は、机の上に置かれた毛利蘭の写真を手に取ると、感慨深げに口を開いた。

「“工藤新一”が“黒羽快斗”にそっくりなだけでなく、幼なじみである“毛利蘭”と“中森青子”もそっくりだとは……なにやら、因縁めいたものを感じますな」

「そっかあ？」

快斗は資料から別の写真を取り出し、ニヤリとすると、だらしなく顔を崩して眺めはじめた。

「青子よりずっとスタイルいいぜ」

その台詞で寺井は、快斗の手にある写真がどのようなものか、想像がついた。手に入れるのにとっても苦労した……毛利蘭の水着姿の写真であることが。

「工藤新一は、最近は事件にかかりきりで学校に来ていないようですな」

「そうみたいだな。一度間近で拝んでみたかったけど……まあ、とりあえず今回は工藤に変装して敵状視察といきますか」

快斗は蘭の写真を胸ポケットにしまいこむと、ゆるんでいた顔を引き締める。そして、工藤新一のデータを頭に叩き込むべく、口調・癖・嗜好・思考手順などをトレースし始めた。

「声は……ほぼ同じだから問題ないな」

目を閉じて工藤新一の声を何度も聞きなおすが、自分が話しているのかと勘違いしそうになるほど、快斗の声と似ている。

「資料から察するに、目立ちたがり屋で自信家。それに……キザだな。……って、人のこと言えねー……」

快斗は半笑いになって、目を通していた工藤新一の言語録から顔を上げる。

「高校生探偵なんて言われてるし、かなり切れるヤツだな。白馬と同等か……それ以上か……」

初めて工藤新一と対峙したあの時計台事件の夜。町のシンボルであり、思い出の場所を守ろうとした怪盗キッドを、かつてない窮地に追い込んだ高校生探偵。

あのスリルに満ちた夜を思い出すと、快斗はゾクゾクするような感覚に知らず口端を持ち上げていた。

「さあて……鈴木家の面々は調査済み。鍵になる鈴木園子と毛利蘭を觀察させて頂きますか。それに、毛利蘭から工藤の情報を入れられるかもしれねーしな」

これからも怪盗キッドの前に立ちほだからであろう、工藤新一の弱みを握れたら面白いと、ほくそ笑む快斗であった。

chapter 0 愚者（後書き）

様々なところでニアミスするキッドと蘭。

特に劇場版の作品で「もしかしてキッドって!？」みたいな場面が多々あります。

そこで、キッド視点で「名探偵コナン」を書いてみたいなあと思うようになりました。

書ける時間が少ないので、更新のペースは遅くなりますが、楽しんで頂けると嬉しいです。

誤字脱字等おかしい部分がありましたらご指摘ください。

また、感想など頂けると励みになります。

chapter 1 フォルトウーナの気まぐれ

帝丹高校前。

門からはブレザーを着た生徒達が流れ出ていた。その群青色の波に逆らうように門に向かう少年がひとり。幾人かの生徒が少年に気づき、名前を呼び歩みを止めて振り返る。

凜とした空気をその身にまとった少年は、名前を呼ばれたことに気づくと、軽く手を上げそれらに応える。その口元に浮かぶ不適な笑みは彼の自信をうかがわせ、見るものを惹きつけた。

「工藤、何してんだよ。今日の試験終わっちまっただろーが。留年でもする気か？」

遠巻きで見守るものが多い中、人懐こい笑顔とともに男子生徒が軽く肩を叩いてきた。

「よお、高橋。久しぶりだな。なんか、事件解決すんのに手間取っちまってな」

工藤と呼ばれた少年は、バツが悪そうに頭をかいた。

「お前……腕が落ちたんじゃねーの？」

「うつせーよ」

「毛利が心配してたぞ。なんか色々先生に頼んだりしてよー」

「へえ……」

「やつぱ、夫婦なだけあるな！」

「まあな」

その答えに、ニヤニヤ笑いながら肩を叩いていた手が止まり、高橋はきよんとした顔をした。それをみた少年は、顔を赤らめると幾分慌てた表情をする。

「バツ……バ一口！ 冗談だよ。本気にすんなよ」

「……いつも全力で否定すのに認めるから、なんかあったのかと思っただぜ。進展したのか？」

高橋は一瞬複雑そうな表情を浮かべたが、すぐにからかうような笑顔に戻った。

「ハハハ……んなワケねーよ……」

少年は高橋に気取られぬように、そつと息を吐いた。

情報通を自負する親友に、“彼”のことを伝えられたのは先ほどのこと。試験が終わった頃にのこのこと現れて、女生徒に囲まれて鼻の下を伸ばしているという。

容易に想像がつくその場面に、こみ上げてくる怒りを拳を握り締めることでどうにか抑えつけ、蘭は職員室に向かって走っていた。

（まったく、あの推理オタクは！ 来るなら来るって一言教えてくれたらいいじゃない）

大きな事件を追っている、とは本人の弁。それを理由に、あの幼馴染が登校することは非常に稀である。休学届を出すと聞いてはいらないもの、今現在休学していないことは明らかなのだ。ならば、このチャンスを逃すわけにはいかない。

「新一！ 覚えてなさいよっ！」

なにやら背筋に冷たいものを感じたが、緊張しているせいかと少年は頭を振り、目の前の女生徒に微笑みかけた。

「工藤先輩、どんな事件を追いかけてたんですか？」

「工藤、もう毎日通えるのか？」

「工藤くん、心配してたんだよ」

遠巻きにしているものも含め、すっかり生徒達に囲まれてしまった少年は、最初こそ「同じ外見なのに、この注目ぶりの差はなんなんだ」と拗ねていたが、段々と調子に乗ってきていた。

そう、少年とは、工藤新一に変装した黒羽快斗であった。

“変装”とは言っても髪形を少々いじるだけでよかったのだが、いまのところ誰にも疑われてはいない。

問題は、工藤新一の幼なじみの彼女だけだと快斗は考えている。

「新一ー！」

怒気を含んだ高い声がすると、生徒達の顔が強張りさつと潮が引くように離れていく。その様子に殺気を感じ取った快斗が振り返ると、青い影と共に形のいい脚が目飛び込んできた。

「げっ」

快斗は身体を反らして、寸前のところでかわす。

「白か……」

覆水盆に返らず。後悔先に立たず。後の祭り。

にやけた顔で思わずもらしてしまった言葉は、はっとしてスカートを押さえた綺麗な脚の主、毛利蘭を怒らせるには十分だった。

「どこみてんのよっ！ このスケベ！」

「ちょ、待て！」

彼女は羞恥で頬を染めながらも、脚での鋭い攻撃を止めない。

さすが空手の都大会優勝者。

快斗は本気で攻撃されると死ねるかも、などと考えながら蘭との攻防を楽しんでいた。

“新一”を取り囲んでいた面々は、突如始まった痴話喧嘩にはやし立てるもの、蘭の登場で彼に近づくのを諦めて遠巻きに様子を見るものなど、反応は様々だ。

「めったに連絡くれないくせに！」

快斗は彼女の瞳に揺れるものを認めた。

「お、おい……」

「久しぶりに出てきたと思ったら、こんな所でデレデレしちゃって……」

「落ち着けて」

「うるさいっ！」

なるほど。

工藤は、恋人の毛利蘭ともめったに連絡を取らない。と言っのとは本当だったのか……。それに、高橋の反応から察するに “恋人” ではないようだ。

快斗は素早く間合いに入り込むと、蘭の手をつかんで引き寄せた。ギャラリーからは、歓声とも悲鳴とも取れる声があがる中、彼女の耳元に顔を寄せそつと囁く。

「蘭。他のヤツにも見えちまうだろ」
「え」

快斗は蘭を正面に捕らえなおすと、驚きでまんまるに見開かれた彼女の瞳を見つめて少年らしい笑顔を見せた。

「俺だけになら、いくら見せてもいいけどな」

蘭は真つ赤になって固まっていたが、我にかえると快斗の腕をガシッと抱え込み、すたすたと歩き出した。

「バカなことやってないで行くわよ」

「へ？ どこへ？」

「職員室に決まってるでしょ」

「へ？ なんで？」

蘭は立ち止まり、白い目で快斗をにらみつけると、快斗の鼻を思い切りつまみあげる。

「いてええええ」

「大馬鹿推理之助が事件に夢中になっている間、出席日数カバーするために、どれだけ苦労してると思ってんの。せつかく試験日に来れたんだから、しっかり試験受けてもらいますからね」

「へ？ 試験って、終わったよな？」

「終わったよ」

「何で今から試験あんの？」

「感謝してよね。特別に受けられるようにしてもらったんだから」

「げ」

「『げ』じゃないの。明日はちゃんと朝から受けなさいよ。迎えに行きますからね！」

「ええええええ！？」

試験休みに入っていた快斗は、帝丹高校の試験終了時刻を見計らって来ていたのだが、快斗の腕をしっかりと引きずっていく、工藤新一の幼なじみによる予想外の行動に、来るタイミングを間違えたのかと後悔し始めていた。

chapter 1 フォルトウーナの気まぐれ（後書き）

大変お待たせしました。前話から二ヶ月かかってしまいました（汗）
ごめんなさい。

プロットを大幅に変更しようと改変しかけたり、仕事が忙しくなったりと、なかなか進まなかったのですが、やはり、当初の設定通りにお話を進めることにしました。

更新スピードはこれぐらいになるかと思いますが、まったりお付き合ひ頂けるとうれしいです。

また、感想などを頂けると飛び上がって喜びます。

chapter 2 絡まる糸

「お……終わった……」

「おう。お疲れ」

試験が終わると同時に机に突っ伏した快斗の頭を、教師がプリントの束で叩く。

「工藤、毛利に感謝しとけよ。この試験クリアしとけば首の皮繋がるんだからな」

「へーい……。バーロ……。どの程度の点を取ればいいのかわかんねーから、自分の試験より疲れちまったじゃねーか……」

「ん？　なんか言ったか？　ほら、早くせんか。外で嫁が待ってるぞ」

のろのろと教師が指で示した方を見ると、教室をのぞきこむ蘭の姿が見えた。蘭は快斗と目が合うと、嬉しそうに顔をほころばした。犬みてえ……などと思いつながらぼんやりと蘭を見つめていた快斗は、「なーに嫁に見惚れてるんだ」と頭を叩かれ、教室から追い出された。

「大丈夫？　新一」

結構きつめに頭を叩かれていた快斗を、蘭は心配そうに見上げている。

「あ、ああ……。ずっと待ってたのか？」

「うん。私が試験受けてって言ったんだし、当然でしょ。それに久しぶりなんだから一緒に帰る」

幸せそうに笑い、無意識にでも身体全体で、“一緒に居れてうれしい”を表現している蘭をみて、快斗は新一が羨ましいと思った。

それにしても、素直なんだか素直じゃないのか、よくわからん子

だな……。青子に似てっから親近感はあるけど……。

快斗は顎に手を当て、蘭を見つめたまま彼女に対して懐くよく分からぬ感情について考えてみた。

「し……新一？」

快斗の視線を外すことも出来ず、居心地悪そうにもぞもぞとしていた蘭の視界に、黒いものが飛び込んできた。

「ちょっと、いい加減にしてよね。ココにいるのは蘭だけじゃないのよ、新一くん」

「いつてえええええ！」

「ちょっと新一、大丈夫！？」

意識を飛ばしているときに突然背後から頭を殴られた快斗は、痛さのあまりしゃがみこんでいた。

「何だ今の……鞆？ あ？ 鈴木園子……」

快斗を鞆で殴った張本人の園子は、仁王立ちになって胸を張る。

「ええ、そうよ。鈴木園子様よ。蘭と一緒に三時間近くも待っててあげたんだからね、感謝しなさい」

「もう園子。新一がバカになったらどうするのよ」

快斗の頭を心配そうになでながら、蘭が園子に抗議する。

「何言ってるのよ、蘭。十分“推理馬鹿”なんだから、それが治るかもしれないじゃない」

「……なるほど」

「『なるほど』じゃねーよ。バー口……」

蘭と園子の会話で“新一”であることを取り戻した快斗は、頭をさすりながら立ち上がると軽く園子をにらみつけた。

「園子……そんなもんで殴るか？ フツー。おめー、覚えてろ」

「あら。そんなことを言っているのかしら？」

園子はオーバーに肩をすくめた。

「蘭を一人で待たせるのはかわいそうだから、一緒に待っていてあげたけど、新一さんの試験が終わったら、二人きりにしてあげようと思っただのに」

園子は勝ち誇ったように快斗を見てニヤリと笑った。

快斗としては園子がいるのは大歓迎なのだが、“新一”は歓迎しないのだからと苦笑しつつ、園子をうらみがましそうに見た。

「もう、園子。一緒に帰る？ せっかく一緒に待っていてくれたのに

……ね？」

首をかしげて園子にお願いする蘭を見てドキッとした快斗は、この手の顔に弱いのだろうかと思問自答していた。

「ねえ新一、試験が終わったら、トロピカルランドに行こう？」

「ん？」

階段の踊り場でスカートをひるがえしながら振り返ると、蘭はにつこり微笑んだ。長い髪からただよう、かすかな甘い香りが快斗の鼻腔をくすぐる。

「だって、この前行った時は事件に巻き込まれちゃうし、新一は途中でいなくなっちゃうし……思い切り楽しめなかったんだもん」

蘭は頬を軽く膨らませ、抗議の視線を快斗に向けた。

……途中で？

「それには、私は含まれてないわよね」
園子のからかうような声がする。

彼女を置いて、いなくなった？

「ごめーん、園子。今度一緒に行こ？」

「はいはい。お邪魔になるのにわざわざ行きませんよーだ」
「そんなんじゃないんだってば」

快斗は二人の話す様子を目で追いながら、思考をめぐらす。蘭から聞いた工藤新一の行動に違和感を感じたが、新一の人物像をつかみきれていない今の状態では、それを形にすることができなかった。

「新一ってば！ 聞ってるの？」

「うわっ」

軽く袖を引っ張られてバランスを崩すと、目の前には蘭の拗ねた顔。前髪が触れるほどの距離に驚いて飛びのいた快斗は、本日何度目かの“らしくない行動”に内心舌打ちした。

「あ、あぶねーだろ……。んで、なんだっけ……トロピカルランド？」

「そうよ」

「え、えーっと……」

守れもしない約束はしたくない。

なんとか約束をしなくて済む方法はないものかと考えながら、快斗は話題を変えようとした。

「そういえば……さ、試験終わるのっていつだったけ？」

快斗の言葉に蘭の顔は曇り、園子は呆れた顔をして「だめだこりや」と肩をすくめた。

「ちよつと、しつかりしてよ、新一。試験は明後日まで。お願いだから試験は受けてよね。呼び出しがあつても行っちゃだめだよ？朝、迎えに行くからね」

「……え。試験……受けるの？……俺が？」

「当たり前でしょう？」

蘭の必死な表情に、快斗の心は揺れる。

工藤新一じゃねえとバレてねーのは有難いんだけど……。

「ねえ、新一？」

青子に似た顔で、そんな顔すんなって……。

「ねえってば」

「……………」

快斗は大きなため息をひとつつくと、降参とばかり両腕をあげた。

「わかったよ……。受けるよ。受けさせていただきます……………」

明日は早朝から工藤邸か……。快斗はがつくりと肩を落とした。

「よかったあ……………」

蘭の、心底ほつとしたような笑顔を見て快斗は、工藤新一はどんな気持ちで彼女の隣にいるのだろうか、思いをはせた。俺と……同じだろうか。

「今日是一緒に勉強しよう。明後日は映画に行こうね。あ、トロピカルランドも忘れないでよ」

「……………いろいろひっぱりまわす気だな」

「だって、新一。またいついなくなるか、わかんないんだもん。映画も一緒に観れなかったし、トロピカルランドだって……」

「わーった、わーった。なんでも付き合ってたから。心配すんなって」

快斗は目を細め、やわらかに微笑むと、蘭の頭をくしゃつとなでた。

危険なのに、何言ってるんだ、オレは……。

「コホン。お邪魔なようだけど……明日は私に付き合ってたね、新一くん」

「おめーもかよ」

どうにでもしやがれと言うような目で園子を見ると、園子はジロリと快斗を睨みつけてから、ぷつと笑い出した。

「やーね、冗談よ。蘭に殺されちゃうわ」

「なによそれー!?!」

真っ赤になって口をとがらせていた蘭に、急ぎ足で階段を駆け下りてきた女生徒がぶつかかった。

「きゃっ」

「わっ」

「え」

はずみで転びかけた女生徒を、とっさに抱きとめていた快斗の視界に、ドミノ倒しのよう二人が階段から落ちそうになっているのが映る

「蘭! 園子っ!」

やべえ!

快斗は園子の伸ばされていた腕をつかむと、思い切り引き寄せ踊り場に放り投げた。そしてそのまま慣性に従い、蘭の下に滑り込むと彼女を抱き締める。

「蘭！ 舌嚙むなよっ」

「新一、だめっ」

快斗の腕の中で、自分が下になろうともがく蘭を傷つけまいと、彼女を抱き締める腕に力を込める。

「バカなことしてねーで、おめーは素直に守られている」
「しん……」

踊り場でしゃがみ込んだまま叫ぶ園子。

ヒビが入り薄汚れた天井。

腕の中で微かに震える心優しい少女。

一瞬が、とても長く感じられたかと思うと、激しい衝撃が快斗を襲い、鈍い痛みがじわりじわりと全身を支配していった。

「新一っ！！ 大丈夫！？ 新一！」

快斗は、心配そうにのぞき込んでいる、蘭の頬に流れる涙を指で拭い、大丈夫というように微笑んだ。

「怪我は……ねーか？」

「ないよ！ 新一が守ってくれたから、怪我なんてしてない！」

「そっか……よかつ……ぐっ」

刹那。刺すような痛みが全身を駆けめぐり、快斗の身体は痛みに耐えきれず意識を手放そうとする。

「新一！？」

彼女がオレを呼ぶ声が聞こえる。

「しっかりして！ 新一！ 園子が救急車を呼びに行ってくれてるから……お願い……新一……」

違う。

「ごめんね……新一……新一」

違う。

それはオレの名前じゃない……オレは……。

快斗は混濁した意識の中、彼女に自分の名を告げようとし、即座にもう一つの意識がそれを否定する。

二つの意識は互いに混じり合い、反発しあい、そのまま深い闇の中で眠りにおちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7888d/>

幻影 - Black Star

2010年10月10日15時49分発行